

コーヘンに於ける根源と非有

由良哲次

コーヘンの論理學は、その『純粹』といふ名の故に屢誤り解せらるゝ如く、單なる形式的認識論ではない。彼はその序説に於ても明言せる様に彼の『純粹』とは内容より離れたる空なる形式を意味するのではなく、たゞ不純なる、従つて眞ならざる内容に對して純化する所にその意味をもち、常に内容に對して不可避的なる關係をもち、これなしは、その意義を有しない。コーヘンは特にプラトールとともに、その思惟法は常に *in secula* であり、『純粹を感性にまで推し及ぼす大膽』を有してゐた。コーヘンによればプラトールに於けるイデーの意味する純粹直観は即ち純粹思惟であり、純粹思惟は即ち純粹直観であり、従つてそれは同時に認識の眞なる内容を意味し、眞の有を意味したのである。(Cohen: *Logik d. r. Erkenntnis*, 2A, S. 5f.) その純粹の意味をプラトールのそれに享くるコーヘンの論理學の内容的具體的彫塑的なる特質は一つにこの純粹の概念の有する特質によるのである。

しかしてかゝる純粹、即ち認識の眞なる内容に即し眞なる有を齎らす純化に於て、その内容となるものは、同時に純化する動き自らと根源を異にするものたることを許されない。彼の『純粹』は具體的なる純化を意味すると同時にまたその純化の内容容そのものは純粹に自らにのみ根源するものたることを要求する。コーヘンによればカントの純粹直觀は固よりデカルト・ライブニッツの純粹思惟と相掩ふものがあるが、しかしカントはこの二者を峻別し、直觀を思惟に先行せしめ、思惟は自ら以外のあるものに於てその始原をもつた。しかし乍ら思惟はその純粹性を全たからしめんがためには、その根源を自ら以外のものにもつことは許されない。純粹思惟はあくまでも只自らの内に、又自らによつてのみ純粹認識を産み出さねばならぬ。

(Log. S. 135) 彼はカントのコペルニクスの轉廻の究極基礎を只思惟に求めたのである。彼にては最も根源的なる思惟以外の異質不純なる何物をも獨斷せず、思惟以前に予想さるゝ受動的なる所謂直觀を先定することなく、あらゆる外的なる有と受容性より純粹に、只自らに於ける根源的なる内容にのみ即する純化による對象の產出こそ實に彼に於ける純粹なる根源的思惟の意味である。かくしてかゝる思惟の學は認識の學であり、かゝるそれ自らに認識を齎らす根源的なる思惟に於てコーヘン

の論理學は成立する。

かくしてまたコーヘンに於ける純粹思惟は自ら獨殊にして深邃なる意味をもつ。コーヘンの思惟の概念によれば、思惟は單なる表象ではなく、表象の結合でもなく、又カントに於ける如き直觀と思惟との *Zusammensetzen* でもなく、只統一的なる綜合であり、綜合は統一のための綜合である。カントにては思惟の綜合は直觀の多様を豫想し、この多様は思惟の創造すべきものではなくして只與へられたるものであり、おのづからそは思惟の根源性と無前提的獨立性を侵害することゝなつた。コーヘンにては『思惟が自ら見出し得る所のもののみが思惟に與へられるとして妥當する。従つて産み出だし得べきあらゆる内容の根源を思惟自らの中におくこと、これが思惟の第一の希求である。』コーヘンの思惟の純粹性の要求する所は全たき意義に於て具體的且つ根源的なるが故に、思惟は彼のふさはしくも言へる如く、それ自身に創造的主權 *die schöpferische Sovereignität* を有するものでなければならぬ。しかしかゝる思惟の根源的創造性を最も明かに示すものは産出作用といふ概念である。コーヘンに於ては思惟の特質としてのこの産出作用は統一の産出であるとともに又産出する作用が即ち産出されたるものであるといふ二つの契機を有することもまた

自らなることである。否むしろ『産出作用と所産との一致といふことが純粹思惟の概念を要求する』のである。かくして『産出作用の源泉は所産たる思惟内容の源泉であり、かく内容に關係することによつて益々切實且つ適確に論理學に近づき得る』のである。しかしてかゝる思惟の特質を無限分析的なる數學的思惟法によつて一層嚴密にし、統一的産出としての思惟の特質の内面規定を明かにするものは根源及び判断の概念である。

『吾等の欲する所は認識に於て對象を構成せんために、要素そのものを先づその根源より純粹生産にまで齎らさんことである。』思惟は認識の思惟であるならば、思惟はその出發點と根據を根源の思惟にもつ。かゝる深き意味に於て、産出は根源の産出として理解せられ、單なる譬喩より脱して思惟も亦産出によつて明かなる方法的規定に達することが出来る。思惟は根源の思惟である。根源には何物も與へらるることを許さぬ。原理とは文字通りの嚴密さを以つて基礎づけであり、根據は根源である。思惟は根源に於て有を見出すべきならば有は思惟によつて措かれうる以外の如何な基礎をも要せぬ。根源の思惟として初めて純粹思惟は眞たることを得る。かくして根源は思惟の必然的始原であると同時に又、そのあらゆる進行を可

能ならしむる *treibendes Prinzip* である。従つて論理學は根源の論理學となり、あらゆる純粹認識は根源の原理の變化である。一切の純粹認識に根源の原理が貫徹す。かくして根源の論理學は純粹認識の論理學となる。そしてこの根源こそ論理學によつて取扱はるべきアルキメデスの重心である。

しかしてかゝる究極の基礎づけとしての、むしろ産出としての思惟は、また彼に極めて獨殊なる意義を有する判断として特質づけられる。彼に於ける判断とは表象ではなく、又單なる主語と客語の結合たる命題ではなく、従つてこの點に於て判断の思惟を取扱ふ論理學は表象を取扱ふ心理學でもなく、又文法學でもない。思惟は雜多に對する *Sammlung* でなく、統一の生産としての *Vereinigung* である。彼によれば産出といひ統一といふことは絶対第一の基礎石の優占に外ならず、思惟の素材とは異質的な *Voraussetzung* ではなく、只統一的なる思惟の内容である。しかしてかゝる終極に自ら生産し統一し、自らに基礎づけゆく思惟は範疇的判断として發展する。即ち根本方向、目的としての範疇をもつ判断こそ思惟の自己發展である。思惟はもと全體的不分の活動であるが、判断に於ける統一への綜合は、綜合が同時に分離であり、分離であると同時に合一である。純粹思惟の活動にては合一が分離と考へられ分

離が合一と考へらるゝ相關關係に於ける根源的なるものゝ綜合的發展である。しかもこの分離と合一の相關關係は任意的な交換代位されうべきものではなく、分離に於て合一が保持され合一に於て分離が保有され、即ち分離はそれ自身合一であつて、たゞ合一の他の方向に外ならぬものである。この判斷の活動に於ける特質は又同時に内容に於て妥當し、判斷の統一は同時にその内容の統一であり、數多性の中に統一が統一の中に數多性が保有せられる。コーヘンのこの統一は即ちプラトニーよつて然く規定されたる理念であり、自らの價値の *Mehrung* と *Befestigung* のために分離を要求し、その綜合に於て終極の歸結に達することなき永遠の發展であり、かくしてその作用が内容であることによつて自ら判斷の内容を産み、且つ確保する。かくしてコーヘンに於ける判斷とは單なる主觀の作用を意味するのではなく、常に内容的なるものゝ分離と合一とが相關關係に於て互に相保持する統一の活動であり、これが純粹思惟の生動的なる現前の姿であり、この分離と合一の透徹としての統一の意識が判斷をしてザツハリツヒなる認識の根本手段たらしめる。即ち内容は統一的活動の中に止揚され、統一が活動の中に動搖するに止らず、内容が前景にあらはれて物を確證し、その保持は存續となり、活動に對する抵抗となり、かくて物が對象とな

る。かくの如くにして判断の統一は認識の統一に於ける對象の統一の産出である。
(Log. S. 52-68)

二

以上吾等はコーヘンの論理學の一般的基礎として特に重要な諸特質を、主として彼の言葉によつて叙したのであるが、彼の論理學の出發點であり究極點でありその源泉であり、また問題であり同時にその體系のクイントエセンスの理解の鍵となるものは根源の概念である。根源は彼の體系に於けるすべてのものゝ始原であり一切の歸趨點である。しかしてこの根源に於ける唯一の働きたる根源の思惟は、その働くこと自らに於て常に内容的具體的なる粹化の作用であり、作用することは即ち自らの内容を産み出だすことである。しかして彼にては産出する働きたる根源は同時に根據づけであり、根據づけは原理であり、根源は原理である。『あらゆる思惟認識對象に對する根源の制約は即ち生産であり基礎づけである。』根源的なる思惟こそ全たき意味にての認識を産み、對象を生じ、眞の有を齎らし且つ同時に基礎づくるものである。この意味にてコーヘンの論理學はかゝる根源に於て究極の一元を求むる全たき意味にての具體的一元論である。彼は『常に sachliche Waisung を有す

る古典的理想主義より』その具體論理の生ける生命を汲み來つた。彼は單なる形式論理學に對しては、その事實的權利の争はるゝのみならず、それが眞に歴史的に存立せしか否かすら疑はしいとし、傳承的論理學に對する非難は如何程峻嚴であつても尙ほ足りないとしてゐる。(U. 54)彼の論理學はあらゆる具體性と事實性より抽象し去つた形式的論理の意味を論ずる *Verlogik* ではなく、具體對象を生産し、現實界を構成し根源より基礎づくる意味にての認識を論ずる *Weltlogik* である。それは單なる抽象的形式の論理的考察に止まるのではなく、對象を従つて具體的現實界を内容的具體的に生産し構成する根源的作用、具體産出の論理である。固よりこの産出過程は單なる必然の推移でもなく、既に完成されたる圓現の部分的時間的流出を説くのもなく、只唯一一元の究極根元よりそれ自身の根源的特質たる體系理念の作用化によつてあらゆる内容が連続的に生産され永遠に發展實現する、ナイトルプの語をすれば『無限次元に於ける無限の相關による』發展の過程そのものを説く動的一元論であり、相關的方法論である。しかしてコーヘンに於ける根源は自らがあらゆる有、あらゆる存在と生成の根柢であるとともに又その終極の基礎づけであり、原理である。即ちコーヘンにては所謂存在的 *Faktum* と論理的 *Begründung* とが根源に於て唯

一として定立されてゐる。この意味に於ては彼に於ける事實的具體的なるものゝ産出の論理は同時にそれを根源的に基礎づくることを意味する論理主義である。

もしコーヘンの論理學をかくの如く特質づくることを得べしとせば、吾等はまた彼の哲學の根本に於て承認されたる思惟と存在の *Identität* を見出すに苦しまないであらう。純粹なる思惟は常にその純化する内容に相即し、作用そのものが内容であり、純粹思惟は直ちに純粹直觀であり、『有は思惟の有である』とされる基礎には『思惟と存在の一致』が先定されてゐる。この意味にて彼は、固より他のものに比しては獨殊の特質を有しつゝも、一の *Identitätsphilosophie* である。彼はこの思惟と存在の一致、二者の根源的相即をば、古きバルメニデスのそれより繼承してゐる。(J. 15)『有とは思惟の有である。従つて思惟は有の思惟として認識の思惟である。』この根源的なる一致、同一の根本的肯定によつてこそ、思惟自らの自己同一と事態的妥當と且つ有自らの確保とを導き得るのである。コーヘンは言ふ『プラトニーのイデーは二重の價值をもつ。即ちそれは眞の有であると同時にその原型は純純思惟に於てある。イデーは *Erfahrung* を要求し、純粹思惟の不變性の確保によつて眞有はその保證を得る。プラトニーはバルメニデスの *causa* イデーと實體との同一を屢繰返し、この二者は常に

同様な仕方に自らを保ちつゝこの同一性に關係してゐる』。もしこの根源的な同一性を許さないならば、思惟は何等存在に關係することを得ず、思惟の要素といふも砂上に描かれたるものに過ぎない。實に同一性こそ思惟の特性である。有の *Selbigkeit* はこの思惟の同一性の反映に外ならない。(Top) 『論理學の充全の意義は全たき永遠性をもつエレア主義にあらはれてゐる。吾等のエレア主義は思惟と實在との同一性を次の如く嚴密に解釋する。「有に於てはその解決が思惟に於てその素地を含まざる如き問題を有しない」。かくの如きは思惟の問題でもなく、また有の問題でもありえなう』。(L. 588)

かくてコーヘンに於ける根源を始原とし基礎とし原理とする全體系の具體的事象性はその究極基礎に於てこの同一性を定立せるものなることを我等は覺りうるであらう。彼に於ては單なる形式と内容との對立はなく、*Sache* を意味せざる形式なく、*Sache* は常に認識であり、所謂主觀と客觀、存在と當爲との乖離はない。彼の論理學は常に存在と思惟との相即する、思惟による思惟に於てある對象、範疇に基礎づけられたる存在そのものゝ産出を論じ、最も根源的なるものゝ發展を論ずる論理學である。それは抽象的なる對立の一領域を論ずる所謂論理學ではなく、最も具體的なるも

の *Methodik* である。しかし乍ら翻つて考ふるにこの終極に於て認めらる *Identifität* は直ちにそれ自身に發展を含む根源でありうるか。終極的にそれ自ら唯一のものが如何にして又それ自ら發展の根源となりうるか。眞に究極に唯一なる *Identifität* のものは、そのまゝにてはそれ自らに對立と分化を含むものではなく、従つて又發展の方途を辿るの因由を有せざるものでなければならぬ。即ち他に對立を有せず、自らに於て眞に一致せる一態は能作の可能をも有せざる *in sich ruhend* のものである。コーヘンに於ける思惟と有の *Identifität* は思惟そのものゝ根源性の故に、あらゆる有は思惟に於て成立し、思惟は常にザツハリツヒなるものとして作用するものなることを意味し、有と思惟の二者ならぬ相即を説くものであるが、しかしその究極には唯一なるものゝそれ自身の終極一態をその極限に於て要請するものと言はなければならぬ。相即の根柢には同一が豫想され、一致の基礎には一態が先定されねばならぬ。思惟と有の相即的なる發展は自らに定止せる一態をその究極に於てもつ。しかしこの究極の一致、一態は又永遠の至完を意味する靜止ではなく、コーヘンに於てはそれ自身に無限の發展を含む根源でなければならぬ。しからばこの究極の一態そのものに於て既に永遠の發展を齎らし出す内面的要素根源的因由を含むもので

なければならぬ。究極の一態と無限の發展といふ一見相矛盾する如き二つの特質をコーヘンはその根源に歸せしめてゐるかの如くであるが、コーヘンに於てはこの二つの特質の關係は如何にして説明されうるであらうか。抑々一態に於けるそのもの、發展を因由づくる内面的要素は何であらうか。あらゆる具體的なる發展の基底源泉としての根源の *an sich* に於ける内在的契機 *immanentis Moment* は何に求めらるべきか。これコーヘンの體系に於て吾等が訊ね、ばならぬ第一の問題である。吾等はかくして次第に吾等の問題に進み入らねばならぬ。

コーヘンに於ては思惟がすべてであり、すべては只思惟である。あらゆる有は思惟の根源より有として産出されたるもの、彼の全體系の究極基底をなす根源は産出作用たる所にその本質を有し、それは究極に基礎づけつゝ産出する作用、永遠の發展を衝驅する根源的なるはたらきである。彼の全哲學はその根源より成果に至る全體系に互つてあくまでも動的なる相をもつはこれによるのである。彼の哲學を繼承しある意味にては發展したナイトルプの発言をかゝるならば、發展の方途を意味する *Methode* がすべてであり、すべては *Fortgang* である。コーヘンの數學的範疇に於ける實在性 *Realität* の概念すら『點の中に方向が含まれ、曲線の産出が間斷なく行はるゝ

限りに於てその點の絶對性を實在性と名づけるのである』(L. 130) 彼にては『活動のみが内容を産み、『あらゆる内容は活動の中に止揚され』現實的なるものを成立せしめる個別の範疇も只能産的方法の遂行によつて規定されるのである。(Vgs. I 592) その一元的動的なる相に於てコーヘンと可なりの類似性をもつと思はるゝアリストテレスの體系に對して、コーヘンはある點に於ては偏曲せる判斷を持てりとすら考へらるゝ程に、それを獨斷的なりとして排し去るは、アリストテレスに於て尙ほあらゆる實現的働きに絶對に *Prins* する絶對的實體を基底と考ふる點の重きによるのであらう。『絶對を、實在とその思惟との最後にして唯一の基礎と考へることは只絶對といふ以外の何等の内容を有するものでない。絶對的實體とは只關係する作用の豫想たるのみ。』(L. 606)

かくの如く根源的なる作用、それ自身に動的なる働きをあらゆるものゝ根源となし基礎づけとなし根本的に定立する彼の動的一元論は他の多くの哲學體系に比して優位する意義を有するであらう。しかし乍ら根源的なるものを一つの作用として定立することは抑々如何にして可能なるか。その根本定立が單なる形式的なるものでなく、その根源的思惟が單なる理性的思惟でなく、全たき意義にて根源的具體

的なるものであるならば、その所謂作用的なるものも單なる作用ではない。それは schlechthin に Beweglich なものであるとしても、尙ほその具體的なる活動そのものを可能ならしむるものとして、即ち作用的なる所以の内面的契機は分析的考察の對象となり得るであらう。フイヒテに於ける自我の Schlechthin なる根本定立はその内面に Nichtsetzen を含むものであつてこそその具體的發展は可能でありえた様に、たゞ作用的として見出さるゝ根源そのものも、その作用的なる所以はそを作用的ならしむる内面的要素の特質と能作に基づくものでなければならぬ。換言すれば獨立的な作用として見出さるゝ fuer sich なる根源に於て、吾等は尙ほ作用化的なる要素 aktuelles Moment を求めて叙義しなければならぬ。固より作用的なるものを單なる對立的なる相反的要素の關係よりなる辨證的過程と解することに反對するコーヘンに於て、單なる反立的要素の擧示のみを以ては足りないであらう。しかし根源的なりと雖も既に作用的なるものに於て、何等かの意味に於てその作用化的なる要素の特質を叙義することは可能であらう。これ吾等がコーヘンに於て考察を進めようとする第二の點である。

コーヘンに於ては純粹思惟は質を以て初まる。思惟法則特に根源の判斷は嚴密

に質的なものである。『もしアリストテレスがその範疇表を實體を以て始めずして質を以てしたならば彼の形而上學は全たく異なる意義深きものとなつたであらう』。コーヘンに於ては根源の中に質の源泉がある。質としての思惟法則根源の判断は、物體、對象存在の状態ではなく、方法的過程に於ける純粹思惟の状態である。この事は對象の規定に達せんがためには方法的に第一の制約であり、純粹思惟のなすべき第一歩であり、思惟の基礎である。質とはかくの如き基礎的な意味を有する。質以前に何等の物體、對象存在なく、如何なる有も質に先行せず、かくして有を超越するバルメニデスの *Identität* が徹底出来る。かく質を純粹基礎づけと解することは、基礎づけよりして有を導いたプラトンの道を歩むものである。かゝる生産的興味を彼は質及びそれに基づく判断に附與した。あらゆる有、あらゆる對象、あらゆる純粹認識は質により、質から生ずる。(L. 118f)

コーヘンの根源的に具體的動的なる哲學的特質が、その究極的なものを質的なものとしたことは、フイヒテに於けると等しく自らなることである。(Vgl. W. Lw. 1801. *Gesamtfauss.* II. S. 30. 47.) しかし根源が自然科学的認識及び方法的範疇による現實界の基礎をなす限り、しかしてこれらが少なくとも量的規定なくしては考ふべから

ざる以上、こゝに問題となるは質より如何にして量が導き出さるゝかといふことである。こゝにこそ根源が現實の基礎となり、現實は根源の發展たる關係の可能が存する。彼に於て質に關する根源の判斷は量に關する數學の判斷の基礎をなし、この量的なるものゝ意味づけに關しては、吾等が後に説かんとする如く、實在性、數多性、總體性の範疇に於て嚴密なる演繹が試みられてゐる。彼に於ける有を導き出す基礎づけは單なる論理的形式のものではなく、根源的、具體的、事實的のものである限り、量的なるものゝ導出、存在的なるものへの轉化は即ち量化具體化であり、同時に現實化であり、個別化を意味するものである。この意味に於て彼の根源より次第に *Klasse* を追ふ範疇的發展は一の具體的實現化の方法過程である。コーヘンはカントに關してその圖式論は彼の範疇そのものゝみにては *Realisierung* に不充分であることを認めてゐた證據であるとなせるに見ても、カントのそれとは異なるコーヘンの具體的範疇的發展に於てはこの實現を可能ならしむる要素が認められねばならぬ。しかして産出といふことも空虚なる無より内容の偶然的なる出現を意味するのではなく、根源自らの性質適合的な發展的實現でなければならぬ。かゝる具體的現實化の過程を可能ならしむるものは、それ自身根源に存して、しかも純粹に質的な根源を量

化し、具體化し、個別化する内面的能因としての *Materie* とも言ふべきものであり、その能作によつて發展的具體化の過程はより嚴密に、より顯現的に叙義せられゆくものとも言はれうるであらう。固よりこのマテリアは合理化的形式に對する異質的な素材ではなく、範疇的具體化を可能ならしむる基礎的作用としての個別化の原理である。吾等はコーヘンの全體系の發展に於けるかゝる原理乃至は要素を抑々何に求むべきであらうか。これ私が問題を導き出さうとする第三の點である。

コーヘンの論理學體系はカント哲學に於ける二元論的、不可知論的傾向の不徹底にあき足らず、一元的具體的に、しかも經驗的現實に基礎的なる關係を見出さんとするフイヒテ、ヘーゲルの絶對的觀念論とその方向に於て歸趨を同じうしてゐると言ひ得べきであらう。コーヘンはフイヒテ及びヘーゲルの哲學に於て意義多き要素的なるものを自己の哲學に少なからず取り入れつゝも、しかし乍らこれらに對しては必ずしも全たき賛同を示してはゐない。彼はフイヒテの考方を『科學的理性を蔑視するもの』とし、『理論的實在性が破壊されては倫理的イデアリスムスもその方法的根元に於て何等の効果を伴ひうるものではない』としてゐる。(L. 314) またヘーゲルに對してはその矛盾による辨證運動の指向する *Wahrheit* が、數學的自然科學

の基礎の上に立つものでなき點より、その皮相的なるを言ひ、『反對を打倒すること』に於て遂行せらるゝ概念の辨證的運動によつて歴史的視界を擴めんとするが如きは、惡しき慰安であるとし、思惟の内容を安定せしめる根本命題が破滅せしめられては、認識の統一、従つて認識の對象には永遠に到達する能はず、自然科学も精神科學もあらゆる領域に互つてその確定性は終息するとしてゐる。(L. 113) コーヘンの嚴密に學的なる思惟方法こそは、これらの觀念論者のロマンチック的傾向に契合する能はず、その概念詩の『形而上學的幻想曲』に同する能はざる所以であらう。コーヘンはこれらの形而上學者の辨證法に代ふるに數學的『連續』の概念を以てし、『統體』の重視に對して嚴密なる『體系』の理念を基礎的なるものとし、これを數學的嚴密性を以て特性づけ、自然科学的認識と方法的認識とに對して基礎的なる關係を明かにせんとした。コーヘンによればその『連續』は『ヘーゲルの所謂反對を打倒すことに保持せらるゝ辨證の意義を充分に代行し』、理念ヒポテシスとしての()に念まるゝ『體系』の概念はヘーゲルが全體もしくは統體の概念に存する未熟を補ふものである。(L. 117, 329) コーヘンの強調する學的嚴密性はその全哲學の最高理念としての體系、特に認識的思惟の領域に於ては連續の概念によつて最も特質的に且つ根柢的に特質づけ

らるゝと思はれる。

コーヘンに於ける哲學的方法の特質たるこの連続の概念は第一に無限小實在性の連続性としてあらはれる。微積分學の單位に比せらるゝ無限小は感覺とは無關係に、直觀より純粹に、根源の思惟より實在として産出される。かゝる無限小のみが實在は根源に基づいて實在性として定められることを示す。かくして有限なるものはその根源を非感性的なるものにもつ。これ即ち有限的に規定されずして、然も有限的なるものゝ根據となるといふ極限法である。連続とは根源と有限との連絡、微分的諸要素の連絡を意味し、内面的な不斷の連絡、即ち實在性の連続である。實在性は孤立を意味しないが、しかしそれは只連絡の豫想であり、連続の豫想である。(L. 16f) しかしてコーヘンに於ける根源よりの産出はこの連続の作用にかゝはるものである。連続は微分的差異をもつものゝ系列であり、『内容はこの差異性を媒介として可産出的となるべきであり』『産み出すとは *Ersonderung* であり、かゝる *Sonderung* によつて *Hinzufügung* となるといふ *Methodik* によつてのみ、あらゆる思惟内容は産み出される』。彼に於けるかゝる分離を産出し固定する數多性 *Mehrheit* の範疇は連続に於ける生産的分離、分離的なる生産的系列である。また彼の『總體性 *Allheit* の範疇に於

ては unendliche Summation, Zusammenschluss によつて A とは異なる B の内容を産出するところが出来る』『積分の總體性は有限的なるものに關して差異性を規定し、且つそれによつて認識の内容を産出し』『數學的自然科學をして自然の統一に於ける物體の差異性を承認せしめる如き規定を可能ならしめる』(L. 108) ユーヘンに於けるかゝる連續の概念は學的嚴密性に富む極めて意義深きものとして認めなければならぬ。しかし乍ら吾等は尙ほ根源に於ける無限小實在の微分差的系列の産出に於ける微分係數 Differentialquotient の性質と能作、連續的系列に於ける無限發展の根本動因體系的總括に於ける統一的根本作用の内面に於ては、單なる系列的要素以上の、もしくはそれの根柢に存する一つの能因を要認めねばならぬ。連續的生產無限系列、體系的總括の根柢には一つの内面的な根本作用——これを意志實踐的なる意志そのまゝとは差別しつゝ、しかしこれとの密接なる關係に於てと名づけ得べしとするならば、彼の連續の内面的作用その能作の根柢には一つの意志的な根本作用あつて連續的な系列と發展はそれを根柢としてそれに於て、それによつて成立しうることも考へうべきであらう。かくの如くしてのみ初めて創造といひ、産出といひ、連續、統一、體系といふことも充全なる意義を有しうべしとも思はれる。しかしてかゝる根柢的なる要素

意志的な根本作用こそ、また先の現實的對象の個別化の原理としてのマテリアに對して、彼が實在性と相似的なるものとした個性を産む力として、眞の意味にての個性化の原理として特質づけうるであらう。もしかくの如き連續に於ける根本作用、個性化的なる意志を要求されうべしとせば、それは彼の論理學體系に於ては如何なる契機として意味づけられるであらうか。これ吾等が考察を進めたい第四の點である。

三

以上に於て吾等はコーヘンに於ける根源を考察して、先づそれが思惟と存在の Identiaet を根本に定立しつゝ、しかもあらゆる發展の根源たる所以よりして、一態そのものに於て存してその發展を可能ならしむる内在因、その an sich に於ける immanentes Moment の何なるかを問うた。又根源は一つの固定的實體ではなく、あくまでも純粹なる働き、根本的作用たる點より、作用そのものを可能ならしむる内面的要素、その fuer sich に於ける aktuelles Moment の何たるかを問うた。第三に吾等は、彼に於ては根源が純粹に質的なるものとして定立されてゐる所よりして、質より量が産出され、根源が量化し具體化し現實化し、個體化するに於て不可缺なる Materie が如何なる意義を彼に於て有せしめらるべきかを問うた。終にまた彼の根源の産出に於ける根

本特質たる連續に於て、無限小實在の系列を創造しその連續を可能ならしめ統一的發展の基礎たる根本作用として意志的なるものゝ要求さるべきものとせば、それはコーヘンに於て如何なる意義を有すべきものとして認めらるゝかを問うた。しかしして根源の主たる特質として認められたる Identität はその終極の相に於て自らに定止的なるものとせば、第二の特質たる Tautologie と相對立し、又第四の連續といふことが何等かの量的なるもの、少なくとも自らを差別化するものあつて初めて系列として發展すべきものとせば、第三の根源の質的特質とは互ひに相對立するものである。

しかもコーヘンの根源はこの四つの特質と二つの對立を自らに含み且つ止揚せるものとも言へるであらう。しかも又この中第一の特質は同一性なりと雖も然も働きたる根源に於ける同一性として immanentes Moment と雖も aktueli となるべきことを豫想するものとして第二と密接に關係し、第三の質より量への具體化は畢竟產出の問題として連續の根本動因を考ふる第四の問題と互ひに相豫想し、密接に關係する。しかしして以上は又要するに彼の全體系に於ける内容的なるもの、具體的なるもの、動的發展的なるものゝ終極の原理とその諸相を求めて居ることに外ならぬ。

そもく、コーヘンの論理學が單なる所謂形式的認識論ではなく、根源の論理であ

り、眞の意味にての對象の基礎づけ、即ち對象の根源的產出たる認識の論理たる限り、かくの如き要素能因は彼の體系の何處に於いてか最も基礎的なるもの、意義深きものとして認め出されねばならぬであらう。かくの如き意圖を以て彼の體系を精査するとき、かゝる根柢的位置と基本的意味とを有するものは、彼に於ける非有 (Nichtes) の概念であらうと思ふ。固より彼の非有の概念は必ずしもかくの如きものとして、彼の充分に意識的なる努力を以つて充實され、全體系に互つて生動的且つ強調的な言葉を以つて説かれてゐるとは言ひ難い。しかし彼の論理學が一元的具體的なる最も根源的な論理學であればあるだけ、彼に於ける非有の概念は意義多きものであらうと思はれる。コーヘンの哲學はその根本動機の上より見れば、プラトイとカントをその精神的源流とし、これを學的嚴密さを以てより精密に充實し、發展せんとするにある。この點より見てもこれらの二元論の因由と見らるゝ非有と非合理的なるものは、コーヘンの一元論に於て如何に解釋され、如何に止揚され、その體系の中に如何なる名残を止めてゐるかといふことは、自らなる關心の對象でなければならぬ。惟ふにカントの二元論は彼の批判主義の謙讓なる一面に於ける特質ではあるが、しかしその批判の眞義とコペルニクス的要求の意義を深めるならば、二元

論は終極に致命的なる缺陷である。しかしてもしこれを徹底して何等かの意味に於ける一元論的見地に進むならば、かゝるいは、批判的一元論の學的成否は一つに理性の優位に對する他面の内容的非合理的なるものを如何に意味づけ、如何に融合するかにかゝつてゐるとも言はれる。しかしてコーヘンの非有概念は、フイヒテの特に後期の知識學に於ける *Nachsein* の概念に於けると等しく (*Vgl. L. v. 1801, Gesamtausg. II, S. 20—79*) かくの如き位置と意味とを有するものと思はれる。コーヘンに於ける非有概念が如何なる意味を有したりしか、若しくは有すべかりしかを解することによつてカント哲學の一元論的徹底が如何なる程度まで實現されえたるか、もしくは、されうべきかを解することが出来る。もしコーヘンの非有概念にしてこの意味にて充全たる説明がなされ得、もしくは解釋されうべしとせば、こゝにカント哲學のこの意味にての完成を所期し得るでもあらう。コーヘンに於ける非有の概念はかくの如き意味に於ても重要なものであると思はれる。

然らばコーヘンの論理學に於ては非有は如何なるものとして叙義せられてゐるであらうか。吾等は先づこれを訊ねたい。コーヘンによれば與へられるとはその古典的意義によれば課題の構成の制約の意味であり、見出され得ることの謂に外な

らず、思推が自ら見出し得る所のものゝみが思惟に與へられるとして妥當しうる。従つて産み出ださうべきあらゆる内容の根源を思惟自らの中におくこと、これが思惟の第一の切願である。すべて思惟要素の根源の正當性を訊ねることは一つの要求である。思惟の要素はむしろ可規定性としての α を以て示すべく、それは疑問形式としての有、アリストテレスの所謂何にてありしかまなき $\epsilon\omega\upsilon\alpha$ である。この疑問の論理的意味は根源の動力である。しかしてこの疑問が判断の根柢となりうるのは、それが有る答を導き $\epsilon\tau\omega\upsilon\alpha$ を立てるが故である。しかし $\epsilon\tau\omega\upsilon\alpha$ の根源は $\epsilon\tau\omega\upsilon\alpha$ そのものゝ中に求むるを得ざるが故に、判断は $\epsilon\tau\omega\upsilon\alpha$ の根源を求むるために Nichts をたてる。かく $\epsilon\tau\omega\upsilon\alpha$ を求めんために Nichts に向ひ、思惟の眞なる根柢を非有、 Nichtseiendes 、 Nichts に求むる如きは一見無稽の様でもあるが、 $\epsilon\tau\omega\upsilon\alpha$ を産み出す根源は、 $\epsilon\tau\omega\upsilon\alpha$ の基底としての Nichts に於て求められねばならぬ。この Nichts こそコーヘンが希臘哲學の深き理解より汲み出した Nichts である。非有はこの発見のための迂路であり、その過程の Station である。(L. 82f.)

コーヘンは、後にもこれに觸るゝ機會のあらう如く、プラトリーのイデーを Hypothesis として、これに基づくすべての移行發展を無限判断による Methode と解する。それはあ

らゆる認識の根源的特質なるが故に、この無限判断は數學、物理學、並びに文化科學の全領域に互つて應用せられる。従つてこゝにも無限判断の迂路によつて非有を Operationsmittel として常に疑問として止まる Etwas をその根源に於て生産し、規定するものである。しかして根源の發見の迂路に於ける指針は即ち連續の概念である。特に近世に至つてこの概念は思惟に對して基本的意味を有するに至つた。しかして連續は思惟、判断に對して Operation の法則として示される。思惟法則としての連續は分立、集積の外なき感覺に依存するものではなく、統一と統一の連絡を産み出す。統一の思惟は故に連絡によつて制約せられる。しかして思惟は根源の生産であるから根源は連絡によつて制約せられる。産出さるべき根源諸統一の聯絡には如何なる間隙もあることなく、却つて非有こそは一般に眞に移行の道を拓く。こは所與としての Etwas を防ぎ、これのみが眞に根源に導く。概念とは一般に Was ist? といふ疑問であり、思惟に於ける有の基礎づけを意味するならば概念を産み出す判断は Was ist nicht? といふ疑問である。しかしてこの nicht は是に相應する。連續はこの無限判断的否定の是、即ち Nichts 非有を通じてその作用を有し、こゝに聯絡の深き力が保たれる。かくして根源を求めて非有を辿つた意義が始めて見出される。(L. 80)

根源の判断より産み出さるゝものは要素の多態ではなく、*es* そのものゝみである。しかしこゝにも既に非有の運用概念よりする分離が働らく。非有の運用概念は單なる思惟要素ではなく、むしろ連続の力によつて可能となる *Durchgang* である。有そのものは非有によつてその根源を得ねばならぬ。非有は有に對する相關概念ではなく、*relatives Nichts* とは連続の力によつて躍進が遂行せらるべき跳躍板である。(L. 93)

判断はその具體的根源を根源の判断に於てもつ。しかし根源は非有といふ媒介概念を必要とする。しかしこれは吾等が矛盾判断として價値づけんことを欲する否定判断が先在するを言ふのではない。*Nichts* 非有は單なる否定の *Nicht* ではなく、それは只媒介概念たるに止まり、決して獨立な固定的な内容ではない。また非有は根源の發見のために少なくとも手段として必要であつた。しかしそれは *absolutes Nichts* ではなく、一定の發見の行途に向けられたる *relatives Nichts* である。それは *Ursprungs-Etwas* であつた。それはむしろかゝる根源的相關に於て *Etwas* にまで完成する *Nichts* の *Umgehung* であつた。こは極めて多産的にして意義多きものではあるが、しかしこの根源は判断とその内容が單なる無、不存在より生じ來つたかの如く思はしめる。これに對し

て自同性の判断はこの疑念を排して肯定は根源より産出された判断の保持の確保を意味した。しかし自同性の思惟法則はその内容上極めて貧弱なる故に、單なる外觀上の Nichts に對して、眞の Nichts がなければならぬ。Nicht 〃 Nichts との差は言語的に考へても、Nicht は判断の作用に關するのみなるに、Nichts は實體的の形成をもち、それはたとひ *Uding* であつても運用概念である。根源的 Nichts は存在するものゝ最も根本的なるものとの結合に於て現はれるが、Nicht は判断の働きのものに關係する。しかもそのために判断の價值と獨立性が破壊される様なことはない。否定とは判断に關する判断ではなく、判断以前の判断である。積極的なる同一性の原理とともに否定的なる形成の作用が最初より共に存する。しかし否定は二つの判断よりなるのではなく、否定の眞の價值は矛盾を認識してこれを揚示する判断の中に存する。判断の最も重要な權利は誤れる判断を排除しこれを絶無ならしむるにあつて、こゝに Nicht の眞正なる無 *echtes walres Nichts des Nicht* が成立する。Nichts 〃 *es Etwas* の源泉であり、Nicht とは誤つて内容たらんことを要求する *non* \wedge を拒否する判断作用である。(L. 104f)

以上はコーヘンの論理學に於ける無もしくは非有概念の最も著しく現はれてゐ

る *erste Klasse* なる思惟法則の判断に於ける主たる個所より抜き來つたものであるが、これによつても見らるゝ如く、種々なる個所に示されたる非有概念の意味は可なり多義多様の混在を示し、ある見方よりすれば極めて重要なこの概念も、彼自身に於ては必ずしも明瞭なる自覺を以て組織づけられてゐたとは言ひ難い。吾等はこの概念が彼の全體系に於て有する意義を、特に先きに問題の手引として要求した四つの見地と如何に關係して考へらるべきかを攷究するにあつて、この極めて暗き明瞭さを有する概念に、その哲學的起原の上より一般的な基礎的な光を得るために希臘哲學に於けるこの非有概念の意義と發展とを併せ考へることは極めて意義深きことであらう。私はこれに關して若干の準備をもたないではないが、しかしそれへの論究は餘りに特殊なる史的敘述と解釋に互つて、當面の論旨の筋を遠ざかるを恐るゝが故に茲には省略したい。只コーヘン、ナートルプ、ハルトマン等の希臘哲學思想に關する種々なる研究にあらはれたる所を見るも、特にその非有概念の解釋が如何に獨特の意義を有してマールブルク學派の一特質をなすに寄與せるかを觀取するに難くないことを附記するに止める。(未完)